

【泉大津市長賞】

受け継がれるもの

福田 慶之・泉大津市

古風な外観、漂う匂い、激しい機械音。その全てから歴史を感じる。繊維製品の始まりの場所。その門へと進んでいく3つの頼りない影。

昨年、僕は社会人になった。難航を極めた就職活動の末にご縁があったのは、100年以上の歴史をもつ老舗紡績会社。就職活動を始めた当初は頭の片隅にも無かつたような進路だったが、「現実はこんなものだ。」と卒業までの数ヶ月間で自分の気持ちに折り合いをつけ、晴れやかな気持ちで、僅か3名の同期社員と共に入社式の日を迎えた。

そして入社から2ヶ月を迎えた僕たち新入社員は、繊維製品の勉強として、6月1日から10月1日までの4ヶ月間に及ぶ紡績工場での研修を命じられたのだ。

会社がある大阪から特急列車、ローカル線、地方バスを乗り継いで約4時間。人里離れた辺鄙な田舎町で、約80年前に建てられた紡績工場は僕たちを出迎えてくれた。

その佇まいは、落ち着きがあり、どこか悲しげで、「哀愁」という言葉がポツと僕の頭に浮かんだ。

ガラガラと扉を開け、入口から事務室へ入ると、工場長、事務員さん、先輩社員さんの3人が優しい笑顔で僕たちを出迎えてくれた。3人ともおそらく50歳を超えていた。

「彼らが、新入社員だった頃はこの工場にはもつと活気があったのかな。」

そんな事を考えてしまう。

仕事場というよりは、祖父母の家といった雰囲気をもつ事務室には、工場で製造された糸が展示されており、その上には創設当初に撮影されたであろう画質の粗い工場の写真がズラリと飾られている。どの写真もモノクロであるにも関わらず、今の姿からは想像も出来ない程の大きなエネルギーが感じられた。

「この写真の時には、この工場もこんなに活気があったのか。」

ここでもまた、頭の中に「哀愁」が押し寄せる。

作業着に着替えた僕たちは、挨拶を兼ねた工場見学をするため、先輩社員さんの先導で作業現場へ向かった。思いの外広々としたスペースにはたくさんの機械が並んでいるが、その殆どが動いておらず、綿埃がこんもりと積もっていた。

「彼らも、あの写真の時には、フルパワーで働いていたのだろう。」

静寂の中に佇む鋸びた機械の群れを見て、そんな事を思った。

金属製の自動ドアを抜け、奥の部屋へと進むと、「ギューン」という喧しい機械音が耳を刺した。

先へ進むと、年季の入った作業着を身に纏つた従業員たちの姿も見えてきた。皆全身に綿埃を付けながら、一心不乱に機械と向かって作業をしている。機械には、100本もあるうかという程のたくさんの糸が一斉に管に巻かれている。

「ギューン ギューン」

僕たちの話し声をも遮つてしまふほどの機械音は、どうやらこの精紡機と呼ばれる芯に糸を巻いていく機械の仕業だったようだ。

「ギューン ギューン」

絶えず糸を巻き続ける精紡機の音。

作業場を包む綿の香ばしい匂い。

その後、3ヶ月という時間をかけて僕たちが学んだ紡績の工程は、工場研修の前に観た5、60年前の動画資料と全く同じだった。技術は、変わらずに受け継がれているのだなと思った。

だからこそ、「絶えず変化していく時代の流れに取り残されたのだろうか?」とも思った。繊維業界の先細りを物語るのに、この工場の姿は十分すぎるくらいだった。使われていない機械や数少ない従業員数。その他にも事務室にあった写真のような活気も今は無いし、「定食コーナー」や「バイキングコーナー」という看板が掲げられた薄暗い食堂では、定食もバイキングも無く、毎日宅配されるお弁当を食べるだけだった。紡績工場の海外進出が発展する時代の移ろいと共に、この工場からは、様々なものが失われていったようだった。

それでも、この工場には、受け継がれた伝統の技術や製品にかける従業員たちの熱意が変わらぬまま力強く残っていた。

社会に出て数ヶ月の僕には難しい事は分からなかつたが、この小さく燃え続ける炎を大きく再燃させる事が僕たちの使命なのかもしれない。そんな気がしていた。

「ここで生きていくこう。」

決意を胸に乗り込んだ帰りのバスに僕たち以外の乗客はいなかつた。